

三省堂 国語教育

# ことばの学び

a new way of learning Japanese



vol. **14**

特集

## 古典教育を考える



# ことばの学び

三省堂 国語教育

a new way  
of learning  
Japanese



vol. **14**

## CONTENTS

- 1 エッセイ 言葉の影響力 木場 弘子

### 特集 古典教育を考える

- 2 古典を学ぶ喜び 加藤 康子  
6 古典教育のすじみちを考える 田中 俊弥  
8 中学国語 古典の世界に親しもう ―まるごと読んで古典の理解を深める― 野中 三恵子  
9 中学国語 価値ある古典学習 ―楽しく学ぶ3つのアイデア― 日高 辰人

- 10 続 思考力の育成 思考力を育成する対話型の授業 松友 一雄

### 実践交流

- 12 中学国語 「食感のオノマトペ」から学びを広げる 人見 誠  
14 中学国語 生徒の「見方や考え方」を生かし・鍛える、「故郷」の実践  
―「学び合い」を意図した授業の創造― 山田 高秀  
16 小学国語 音読で切り込み、読み深める授業 ―「ごんぎつね」の山場での実践― 佐々木 計江  
18 小学国語 これまでとは違った目で物語を見つめてみよう  
―六年「自分の力でゴールを決める！」の実践より― 茅野 政徳  
20 中学書写 「書ける」先生も「書けない」先生も書写の授業に取り組もう  
神奈川県横浜市立港南台第一中学校 国語科

- 22 本から読み解く今の子ども 第三回 「物語」の必要と不必要について 宮川 健郎

- 23 メディアと言葉を考える 第3回 情報を編集するということ 堀田 龍也

- 24 子どもと本の現場から 03 日本の神話を素晴らしい絵本から 代田 知子

- 25 中学校教科書『現代の国語』訂正のお知らせとお願い

- 25 編集後記

表紙イラスト  
園田カナコ

デザイン  
design Seeds  
瀬戸早苗

エッセイ

# 言葉の影響力

木場 弘子

随分と後になって言葉の持つ影響力を再認識したことがある。それは、中学時代の部活の顧問の先生の言葉だった。当時、私はバスケットボール部にいた。決してスポーツ万能だったわけではなく、当時の私は性格は内向的で人前で話すのが苦手。おまけに、帰国児童で勉強も遅れがち。何事にも自信が持てない子だった。

二年生になったとき、その先生が部員を集め、こう言った。「二年生には積極性と責任感を持ってもらうため、各委員会の委員長に立候補するように。」とても厳しい先生だったので、私はやむなく、所属の広報委員長となった。

しかし、元々放送には興味があったので、委員長となつてからは、昼休みの番組を企画したり、アナウンスをしたり。役職が人を作ると言うが、段々と取り仕切ることの楽しさを覚え、それが今の仕事のきっかけになったように思う。その秋、先生はNYの日本人学校へ行ってしまう、それ切りとなっていた。

ところが、数年前に偶然にお会いしたのだ。講演に出かけると、主催の教育委員会の中にその先生が。名刺を交換しても四半世紀の時のせいで、お互い気づかず。しかし、どこかで見た顔、見た名前。もしかして……。大興奮の再会となった。そして、私が当時の先生の命令に感謝していることをお伝えすることができた。しかし、先生は中々、そのことを思い出せない。

やっと、思い当たったのだが、先生からは意外な答えが返ってきた。「当時は非常に部員数が多く、全員が出てくるとコートが窮屈で練習にならなかつたんだ。だからせめて二年生が委員会で忙しくなつて出席率が下がればと思つてさ。」

照れ隠しにも思えたが、本当に驚いてしまった。指導者からのちよつとした言葉で、私のようにその後の人生に影響が出ることもある。だからこそ、人への言葉は重い。言葉は人に希望を与える魔法でもあり、反対に凶器でもある。人をやる気にさせるのも、どん底につき落とすのも言葉なのだ。

千葉大学教育学部で未来の教師たちに「教育と表現」という講義をして七年。学生のスピーチへの批評には神経を使う。「先生はどんな子にも興味を持って、良い点を探そうとしている。」つい最近学生に言われ、嬉しかった。人の心に意欲の灯をともし。そんな言葉かけができる教師には是非、学生にはなつて欲しいのだ。

きば ひろこ キャスター・千葉大学特命教授。一七八七年、千葉大学教育学部を卒業後、TBS入社。在局中はスポーツキャスターとして活躍し、九二年フリーランスに。内閣府規制改革会議をはじめ省庁の委員を多数務める。浦安市教育委員。

# 古典教育を考える

これからの教育課程改訂において、  
 古典教育はどのように位置づいてくるのでしょうか。  
 現代における古典を学ぶことの意義と  
 学習指導の工夫について考えます。

## 古典を学ぶ喜び

### なぜ古典を勉強するのか

かつて高校の教師をしていたときに「なぜ古典を勉強するのか」と、生徒から質問された。とりあえず納得する答えは「受験にあるから」だが、この答えは、生徒も私も本当のところは腑に落ちなかった。

そこで、「人生にはいろいろなことがある。壁に当たったとき、今まで知らなかった異文

梅花女子大学  
 加藤 康子

化が何かヒントをくれるかもしれない。外国の知識や考え方、感性は刺激的で、いい智慧を提供してくれるが、過去に戻って祖先が語り継ぎ、書き継いで来た物語などからは勇気が与えられるかもしれない。だから古典を勉強するのだ」と考えることにした。

そうは考えたものの、古典を知らなくても生きてはいける、無理矢理に勉強するより、関心をもったときに改めてひもとく方がいい

のではないかと密かに思った。

### 伝承の大切さ

ところが、ここ一、二年、気持ちが変わってきた。祖先から長く伝承されてきた昔話などが伝えられなくなっている現状を、いろいろな研究者から聞くようになったからである。

「いまや、日本では、昔話の伝承は途絶えた。子どもの本や絵本によって、あるいはアニメーションなどの媒体によって再話されるだけになった。もちろん伝えられてきた内容を大きく逸脱し、意味がすっかり異なってしまうことには問題があるが、もともと多少の違いというものは、それぞれに伝えていく中で語り手の個性としてあったことだ。まずは伝えていくことこそが大切なのだ」という考え方に接するようになった。

そして、長年にわたって昔話の採集、分析を続けてきた研究者が、「人は生きていく上で様々な思いや考えを抱くが、それを語りたいと欲求するのが人間。そこに文学は生まれる。文字はなくとも、文明は不充分で、文学を持たない民族はない」と、昔話の伝承の必要性を強く語ることは心動かされた。

私たちは祖先から、物語の形で、あるいは歌の形で、人生の意味や日々の悩みの解決の方法、人の持つ情や信条を伝えられている。



ことばの解釈と背景の歴史や文化状況を説明しなければ伝わらなくなっているのが現状だが、そうした工夫を加えてでも、民族が伝えてきた文学、すなわち伝承を後世に伝えていかなければならないと、今は危機感をもって感じている。目の前の若者たちに伝えなければ、次の世代に伝わらない。今の時代の子どもたちが知らなければ、本当に途絶えてしまうのだという危機感である。

## 子どもとつこの伝承

一方、子どもたちをめぐるさまざまな問題が日々起こっている。私が現在接しているのは十代の終わりから二十代の女性たちが多くが、時折彼女たちの悩みに接することがある。以前はもう少し若い世代の思いに接する体験もした。その中で感じるのは、生きるための〈智恵と勇氣〉が、子どもとその周辺の大人にもう少し欲しいということである。

子どもにとって、生きるための〈智恵と勇氣〉は、知識だけでは身に付かない。身近なところにおいて、愛情を持って見守る大人が存在することによって、初めて血となり肉となるのではないかと考えられる。そうした大人の存在が何よりも大切だと思うが、幼い子どもの場合、この〈智恵と勇氣〉は〈物語経験〉によって認識することができるようである。

つまり、直接話を聞かせてもらうこと、あるいは本や絵本を親しい大人に読んでもらうことが積み重ねられていくことによって、身近な大人の存在とその愛情を感じ、そして物語の中に展開する人生の〈智恵と勇氣〉を身に染みて受け止めることができると思われるのだ。こうした〈物語経験〉を幼い頃から繰り返していくことによって、子どもは想像力の翼を広げ、物語世界をいっそう楽しむことができるようになる。さらにその物語を、身近な大人、あるいは同年代や異年齢の子どもたちと直接交流する中で体験できれば、それぞれの豊かな想像力の翼を他者と共有する喜びも感じ、そこに子ども同士、また子どもと大人との「心の絆」を結ぶことが可能になる。

伝承による〈物語経験〉の重要性は、長年民族が培ってきた生きるための〈智恵と勇氣〉を次世代の一人ひとりに確実に伝え、その一人ひとりの人生を充実させることで、さらに次への伝承を実現させることにある。それだけ、受け止めた子どもにとっては、伝承による〈物語経験〉は深く浸透するといえよう。

メキシコの先住民ウィチョール族やイランの民族と交流し、伝承を採集しに行っている研究者から、これらの地域では現在でも二十代の若者まで民族に伝わる物語をすぐに語ってくれるということを知った。それは遠い異

国の、私たちには関係のない事のように思いがちである。

だが、絵本の読み語り、昔話のストーリーテリングの現場に接すると、話に夢中になっている子どもたちの様子に驚かされ、人は誰でも話を直接語り伝えられることが好きだということに気づく。その積み重ねが子どもたちに〈智恵と勇氣〉を与えていくことに思いをはせたとき、前述の地域の若い世代が当たり前のように伝承を実行していることが、にわかには羨望の思いと共に迫ってくるのだ。

アフリカの昔話の採集に行き、一族の中に一緒に住んで話を聞き続けた研究者は、昼間の労働に疲れた親たちに代わって、祖父母たちが孫たちに長年の経験を踏まえた人生への向き合い方をさまざまな話を通して語っていく伝承の場を説明してくれた。それは、人が生きる上で伝承がいかに大切かということ物語っていた。

私には、口承や書承による伝承、すなわち語り継がれ、書き継がれてきた物語を伝えていくことの重要性が切実な問題として迫ってきたのである。そしてこのことは、古典を学ぶ理由を考えさせることにつながった。

## 古典のおもひやり

現在私が担当しているのは、近代以前日本

児童文学という分野である。日本の子どもがかつてどのような文学体験をしてきたのかを考えると、まずは口承や書承による昔話、伝説、神話、説話などが挙げられる。また、絵巻物や絵入り本が一部の子どもたちに物語を提供してきた。『更級日記』の主人公が『源氏物語』を読む話、旅の途中で「竹芝寺の伝説」を聞く話は、その状況を想像させる。

さらに、多くの物語を提供した「御伽草子」は、木版刷りの絵入り本によって広く一般に浸透していったといわれている。それに続いて、同じく木版刷りの「上方絵本」、「草双紙」、「豆本」などの絵草紙が子どもの読み物ともなったと考えられる。

これらの作品に触れてみるといろいろな意外なことにぶつかる。例えば、「御伽草子」の「一寸法師」は姫に恋し、その思いを遂げるために手段を選ばず策略をめぐらす。「ものくさ太郎」は思い切った方法で気に入った女性を見つけるが、その心をつかんだきっかけは天性の和歌の才能だった。「天稚彦草子」の主人公の娘は困難に出会う度に根気強く乗り越えて恋する夫との出合いを手に入れる。「鉢かづき」の主人公の姫は、恐る恐る恋をしていく内に成長し、たくましくなっていく。また、『宇治拾遺物語』の「鬼に瘤取らるる事」「雀報恩の事」では、村人や家族に軽

んじられている爺や婆が、我を忘れて踊ることや雀の世話に夢中になる姿に生きる力の発露が感じられる。

絵を中心とし、文が加わって物語を展開していく、今日の絵本、マンガの源とも考えられる絵草紙では、素朴ながら力強い絵や、先行する絵巻物や手描きの絵入り本を継承しつつ新しさを加味した物語に魅力を感じる。

『きんときおさなだち』は金太郎絵本の源だが、力強く躍動的な描線に主人公の快童丸の強さが伝わってくる。一方、その快童丸を抱き、見つめる山姥の言動には母親のあふれんばかりの愛情が表現されている。金太郎は成長して源頼光の四天王の一人となるが、頼光たちの英勇譚は繰り返し描かれ続けた。そこには神の助力をもらって仲間と助け合いながらとてつもない鬼神たちに立ち向かっていく頼光たちの物語が展開する。荒唐無稽ではあるが、今日人気を集めているファンタジーの冒険物語に通じる魅力があったのではないかと考えられる。

想像力の豊かさは江戸期の絵草紙に多く見られるが、『真字・草字くらゐ諍ひ』ではカタカナとひらがなが合戦をするという発想がおもしろい。『道具の化物尽し』では、日用品が次々と化けていく絵が生き生きと描かれている。『是は御ぞんじのばけ物にて御座候』



江戸期の絵草紙。江戸中期に江戸で出版された赤本『鼠の嫁入』を改装して出版した作品。初産で子どもが生まれる場面。江戸期の出産の風俗が描かれ、子どもの誕生を祝う家内の様子が描かれている。江戸後期に改装されるほど浸透した。家蔵。

では、室町期の異類合戦物を引き継ぎながらも、新田の化物たちが子どもたちの人気をかけて戦い合う発想やキャラクター化された化物たちの絵に漂う可笑味に新しさがある。

そして、これらの絵草紙には作品の作り手と読者であった江戸期の庶民の生活に根ざした〈智恵と勇氣〉が読みとれるのである。嫁入り次第を動物などの異類で描いた嫁入り物には、結婚をめぐる行事が順を追って描かれる中に、力強く日常生活を生きていく人々の



江戸後期から明治前期に盛んに出版された豆本。右から江戸末期出版の『富貴遊』（日用品が擬人化され、それぞれ愚痴を言い合う内容）、『桃太郎』。明治前期出版の『花咲翁』、『宮本武勇伝』（宮本武蔵の逸話集）。それぞれ表紙は色刷り、中は墨刷り。木版による出版。家蔵。

姿が見出せる。『おにの四季あそび』『雷の四季咄』は、天上世界でさまざまな天候を生みだしている鬼たちの姿を描いているが、いろいろな仕事の作業風景や家庭内の団欒などが取りこまれ、日々の生活が活写されている。

このように古典の物語には、今日伝わっている話とは異なる面が見られたり、そこに力づけてくれるものを見出したりすることができ。「古典には意外性があるかもしれないと思うけど、どう？ 捨てたものじゃないよ。」そのような気持ちで、現在は、「伊曾保物語」「御伽草子」「赤本」「上方絵本」「豆本」などを教材として扱っている。意外な思いから関心を持って読み進め、想像力をたくましくさせると、古典の中に現代の私たちにも通じる人々の生きる姿を発見することができる。そこに力づけてくれるものを見出し、古典を読むおもしろさを感じるのである。

### 古典の読み方

古典を読むときには、語釈や注釈の必要性が障害となって敬遠されたり、堅苦しくなったりする。だが、長い年月を越えてきた作品には、必ず魅力がある。古典が伝えてきた物語には生きるための〈智恵と勇氣〉が、わくわくする物語展開、言葉遊びや語調の楽しさや笑い、素朴ながら力強い絵、意外な発想な

どと共につまっている。幼い子どもほど、この語り継がれ、読み継がれた物語を経験する必要があるのではないかと考えている。

まずは、内容を把握できるように、言葉や文章を工夫し、絵など視覚的な情報も加え、読み語りやストーリーテリング、絵本や紙芝居など、さまざまな伝え方を取り込みながら、伝来の物語に触れることが大切だと考える。

昔話、伝説、説話、神話、絵巻物、絵入り本、絵草紙など、掘り起こしたい教材はまだある。教材化や指導方法には乗り越えなければならぬ課題は少なくないだろうが、今伝えなければ途絶えてしまうのが、伝承であり、古典である。そこには途絶えさせてしまふにはあまりにも惜しい、生きるための〈智恵と勇氣〉がある。大人が愛情を持って、直にこれらの物語を伝えれば、子どもたちはそれを喜びをもって受け止めてくれ、また次の世代へと引き継いでくれるはずである。家庭や地域、そして学校で、豊かな〈物語経験〉が展開されることが、今こそ求められている。

かとう やすこ 梅花女子大学文化表現学部児童文学学科教授。近代以前日本児童文学を担当。専門は江戸期の絵草紙。著書に『幕末・明治豆本集成』等。



# 古典教育のすじみちを考える

大阪教育大学

田中 俊弥

## 一 古典教育はどこにあるのか

現行の小学校の国語教科書には、韻文として万葉集や古今集の歌、芭蕉、蕪村、一茶の句などが掲載されている。教科書によっては、「竹取物語（冒頭）」「百人一首」「枕草子（春はあけぼの）」「平家物語（冒頭）」「論語」「狂言」などの本文が掲載され、なかには、「桃源郷ものがたり」として陶淵明の「桃花源記」が松井直の再話のかたちで載せられているものもある。

国語教育のなかの古典教育においては、「過去の長い年月に亘って、多くの人に尊重され、愛好されてきた文献」（時枝誠記）、すなわち古文としての日本の古典文学や漢詩文としての中国の古典文学がその対象となっており、その学習活動においては、その本文を「声に出して読むこと」が重視されている。その際、基本となっているのは、古文や漢文に親しみ、

作品そのものを理解するという作品主義という考え方である。

子どもたちにとって、古文や漢文（訓読文）の言いまわし、いわゆる文語文の表現は、耳慣れないことば、「むかしの人のことば」であり、違和感をもたれることが少なくない。もちろん、その独特の韻律に興味や関心をおぼえるということもあるが、一般的には、意味のわからない世界として遠ざけられているというのが実情ではないだろうか。

わたしたち教員は、『源氏物語』や『史記』をはじめ、日本の古典文学にゆかりのある、数々の名だたる作品を読んで欲しいと願っている。しかも、それを訳文ではなく、その当時のことばとおして理解してほしいと望んでいる。それは、現実的には、大学入試に古文や漢文が出題されるので、古文や漢文を原文にちかいかたちで読み解く力をつけてほしいと願っているためでもある。

それならば、国語教育における古典教育は、大学入試のためにあるのかということになる。そのことはあながちに否定しがたい現実ではあるが、一方でそれは、一面的にすぎるといふふうにもおもっている。やはり、もっと古典文学の世界にふれ、親しみ、生涯にわたって古典文学を愛好するようになってほしいとおもっているし、日本語の力をゆたかにするために古典を大事にしてほしいとおもっている。

## 二 古典教育は何をめざすのか

「うさぎとかめ」の話は、幼い子どもにもなじみのある話である。しかし、これが、古代ギリシア人・イソップ（アイソポス）のつくったお話であることを知る人は少ないかもしれない。ましてや、この話がいつ日本にもたらされたのかを知る人はもっと少ないかもしれない。いわゆる『イソップ寓話集』は、いまから四百年以上前に、キリシタンの徒によってもたらされ、江戸時代には『伊曾保物語』として広く親しまれるようになったのである。「北風と太陽」の話や肉をくわえた犬が川面に映った自分の姿をみて肉を失う話など、数々のお話がいまも子どもたちの読み物となっている。

イソップのお話を読むことは、それを学習



の対象とすることは、はたして古典教育なのか。中学校では、「虎の威を借る狐」の故事や「株を守る」話などが教材化されており、それは古典教育の範疇のなかで扱われているわけであるが、義務教育段階でイソップの話が古典教育の対象としてとりあげられることはあまりない。それならば、江戸時代の『伊曾保物語』を当時出版された本文のかたち(版本)で読めば古典教育になるのか。わたしたち教師は、そのところをもう一度、問い直してみる必要があるのではないか。

「なよたけのかぐや姫」の話すなわち『竹取物語』は、『源氏物語』のなかでは、「物語のいではじめの祖」(総合)と評価され、長い間にわたって読まれてきた作品ではあるが、その原本の所在は不明である。『源氏物語』にしても、紫式部の自筆本は見つかっていない。したがって、古典文学作品を本文そのものに即して読むということは、よほどの専門家にとっても実は至難のわざなのである。しかしながら、わたしたちは、『竹取物語』がおもしろい話であり、すぐれた文学であることを知っているし、さまざまなかたちで、いまも子どもたちにも親しまれているわけである。古典教育の対象とされる文学が、古文だから漢文だから、古典教育が成立しているのではない。イギリスの国語教育において、シェ

イクスピア作品は、不動の地位をしめ、繰り返し読まれ、こよなく大事にされている。古典の古典たるゆえんは、古い時代のものであっても、時代をこえて、その作品が繰り返し読まれるということであり、そこに読者が汲めど尽きぬ魅力を感じ取るということにとほかならない。実は、その本文のことがぶかいが文語文であるのか、どうかの問題ではなく、再話されたものであれ、現代語訳されたものであれ、マンガ化されたものであれ、その作品のなかのことはや表現がいかに読者の生活や人生にかかわってくるのか、また再び繰り返しその作品を読んでみたいとおもうのかどうか、そのところが問われなければならぬ。しかしながら、現実には、わたしたちは教師は、どこかで、子どもたちに、ダイジェスト版ではなく、作品そのものを、原文にちかいかたちの古文や漢文そのものを読んでほしいと願っているし、読める力をつけてやりたいと努力している。

### 三 古典教育はことば・日本語の教育

国語教育のなかの古典教育は、やはりことば・日本語の教育であるということにかわりはない。「難波津に咲くや木の花冬ごもり今は春べと咲くや木の花」。これは、九〇五年成立の『古今集』の「仮名序」にひかれた歌

であり、百人一首カルタをはじめるときの歌い出しの歌である。これを注釈や参考書なくその意味を理解することはむずかしい。しかし、この歌にある「咲く」や「花」や「春」や「冬」は、いまもわたしたちがつかっていることば・日本語である。実は、国語教育のなかの古典教育が見落としてはならない点は、こうしたことばが日本語としていまも連綿として使い続けられているという事実である。語学教育的なアプローチ、文学教育的なアプローチ、読書教育的なアプローチがあるにせよ、わたしたちは、根本において、ことば・日本語の教育としての古典教育のありかたを探索してみる必要があるのではないだろうか。

ことば・表現は、つねに誰かに向けて差し出されている。古典文学作品のことば・表現もまた、時代をこえてたえずわたしたちにコミュニケーションを求めている。いまとは時代を異にする古典の世界にふれながら、わたしたちのコミュニケーション力・日本語力を豊かにしていく国語教育をめざしたい。

たなか としや 大阪教育大学准教授。現在、大学院実践学校教育専攻(夜間)で、現職の先生方と社会にひらかれた国語の授業づくりに取り組んでいる。

# 古典の世界に親しもう —まるごと読んで古典の理解を深める—

東京学芸大学附属世田谷中学校

野中 三恵子

## 「古典嫌い」に悩まないため」

「中学生を古典嫌いにさせないで欲しい」これは高等学校の先生の話である。受験勉強で古典文法ばかりやってきた生徒は、古典そのものを嫌いになって高校に入学してくるという。高校で本格的に古典の楽しさを学ぶ前に、古典そのものに拒否反応を起こされては、高校の先生もさぞかし大変であろう。

では、中学校でどのような古典学習を行えば、生徒が古典に興味を持ち続けることができるのだろうか。今までの実践からアイデアを紹介する。

## 「まるごと」読む古典

教科書教材では代表的な古典が載っている。「竹取物語」「平家物語」「徒然草」「枕草子」「おくのほそ道」「和歌」「論語」「漢詩」等である。様々な制約から、これらはすべてその作品の極々一部しか載っていない。古典は歴史的な背景、知識などが分かって、初めて面白さが伝わってくる。そこで、「古典をまるごと読む」ことを推奨したい。

すべてというわけにもいかないが、「竹取物語」「平家物語」「おくのほそ道」などは、是非「まるごと」読ませたい作品である。

原文と全訳が書いてある本が出版社の出版社

から出ている。また、イラストや写真が豊富な資料的要素の大きい本や古典漫画なども多く出版されている。「源氏物語」を漫画で理解した方も多いのではないか。（私もその一人だ。）口語訳を読ませるのも良いし、学習漫画でも良い。「全部読んだ！」いう達成感とまるごと理解したという充実感につながる。これは読書の広がりにも通じる。

中一で学習することの多い「竹取物語」では星新一訳の文庫本を読ませた。「竹取物語」は壮大な物語で、登場人物、ストーリーの展開に魅力があり、一年生でもどんどん読める。

中二、三年では「平家物語」「おくのほそ道」を、文庫本でまるごと読んだ。全文を通すことによって「白河の関」や「松島の月」にも触れることができる。

学習のまとめは、古典冒頭部分の「暗唱」だ。古典に慣れる手段になる。「Aすらすら暗唱B最後まで暗唱C途中まで暗唱」といった評価でテストするのも学習効果がある。そして何よりも教師自身が古典の学習を楽しんで、生徒とともに学ぶ主体でありたい。

のなか みえこ 東京都の公立小、附属世田谷小を経て現在の勤務校に。附属世田谷小、附属高校、大学の先生方と共に十二年間を見据えた国語教育の共同研究を行っている。

# 価値ある古典学習 —楽しく学ぶ3つのアイデア—

東京都杉並区立泉南中学校

日高 辰人

古典学習は楽しく、価値あるものでありたい。そのために、各先生方は様々な工夫をしながら古典の指導をされている。私の拙いアイデアを以下に三例紹介する。

## 一 故事成語でのアイデア

「矛盾」を学習後、故事成語の補充として故事成語カードを以下の方法で作らせた。

① 国語便覧にある故事成語を学級人数（小規模校なら学年人数）分選ぶ。

② くじ引きで任意の故事成語をB4程度の画用紙にイメージ画（故事成語カード）を描かせる。

③ 各自の描いた故事成語カードを提示させ、その故事成語を当てさせる。

授業終了後は廊下に作品を掲示し、学年全員の生徒がゆっくりと見られるようにした。友人の描いた故事成語カードを見ることによって、生徒は多くの故事成語を覚えることができた。

## 二 家族との交流を深めるアイデア

「平家物語」の概要説明、冒頭部の暗唱、学習材の読みを行った。次に以下の三つの課題を各自で考えた後に家庭に持ち帰らせ、家族と共に話し合い、それをワークシートに記入させた。

- ① 敦盛の人物像をつかむ。
- ② 直実の心の葛藤を読み取る。
- ③ 直実の出家への思いをつかむ。

家族との話し合いでは、母親と一緒に考えた生徒が多かった。次に兄弟姉妹、最後に父親であった。わずかではあるが、祖父母と共に考えた生徒もいた。

クラスで交流会を行った際に、友人の考えと家族の考えが違っていたり、深まっているのを知り、「君のお母さんなら、そういうだろうなあ」「あなたのお兄さんなら、そう考えそうね」などとの会話がでていた。しかし、生徒・保護者共に忙しすぎるからであるとか、生徒の二〜三割は様々な理由で家族との話し合いができなかったことは残念であった。

## 三 暗唱手助けシートのアイデア

暗唱が苦手な生徒用に各段（行）の最初の何文字かを印刷した用紙を与え、暗唱の手助けとさせる。暗唱などが苦手な生徒でも、何回か行っていくうちに、暗唱のコツをつかみ、様々な古文・漢詩を楽々と暗唱が出来るようになった。

ひだか たつひと 杉並区立泉南中学校主幹。今年度は漢字と書写指導を充実させ、効果的な指導が行えるような授業に取り組んでいる。

# 思考力を育成する対話型の授業

福井大学  
松友 一雄

## 一 対話による学習と思考力の育成

思考力を育成するためには、様々な他者との様々な対話が必要となる。他者との対話が学習経験として積み重ねられていくことで、学習者自身の中に他者が形成され、自己内対話が生成するからである。

学習場面における他者とは、基本的に「教師」と「他の学習者」であるが、本稿では前回触れた「教師」との対話は割愛し、「他の学習者」との対話が思考力を育成するための学習方法としてどのように有効であるのか、という点を述べていくことにする。

## 二 「他の学習者」への意識の形成

他者との対話といっても、おしゃべりのような日常会話の積み重なりで思考力が育成されるというわけではなく、学習場面で教材を媒介としながら論理的な思考の交流が行われ

ることを指している。

それでは国語の学習の中に話し合いの場面を設定する回数を増やせばよいかというと、なかなかそうはいかない。場面を設定したとしても、学習者がなかなか活発に話し合ってくれないことも多い。

この数年、そういった実情を打破するために何が必要かということを探るものとして、福井県や石川県の小中学校の先生方と行ってきた取り組みがあるので紹介したい。

この取り組みでは、学習者同士が向き合って自分の考えを交流する姿が見られるようになるまでには一年から二年かかったが、時間がかかることは覚悟していただき、時間を一つずつ積み上げていった。

- ① 他の学習者の発言や思考に注意を払えるように意識を形成する。
- ② 教師は学習者相互のやりとりを生成さ

せ、深めるための関わりを行う。  
③ 論理的に自分の考えを表現するための力を育成する。

④ 話し合いが論理的に活性化するための課題を考究する。

①に関しては、体の向きや机の配置などの身体的側面からはじまり、とにかく主として教師に向けられている意識を他の学習者の発言や考えに向くように工夫を施した。まずは学習者の発言に他の学習者の名前が挙がるようになることを目指し、小学生には板書にネームプレートを張らせたりその授業で一番よかった発言を振り返らせたりした。中学生にはアドバイスカードを持たせ、級友の発言に対してアドバイスをする機会を設けた。また、こういった取り組みと並行して、教師は②と関連した表1のような関わりをもった。

すると、次第に学習者は他の学習者の発言に耳を傾けるようになり、そのうち質問や意見が学習者相互に向けられるようになった。

その結果、教師の発話量は以前に比べて減少し、学習者の発話量が増加した。教師も含めて学習者が「聞くこと」を強く意識した学習が展開できるようになったのである。

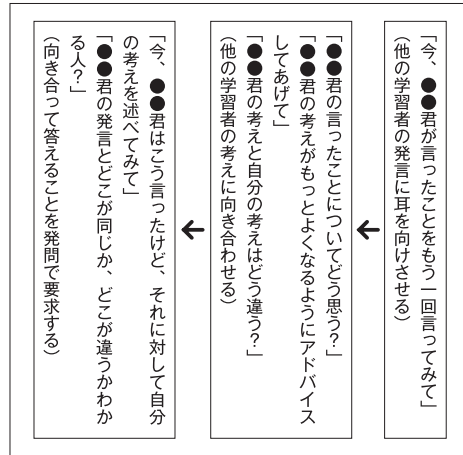
ちなみに③及び④に関しては、詳細は避けるが、学習者の発話が単語レベルで行われて

\* 『ことばの学び』13号「思考力を育成する学習の構想」(P.6-7)



いるうちは論理的に交流することは不可能である。まずは、学習者の発言量を増やす必要があるということだけを指摘しておく。

表1



### 三 話し合いに参加する方法

前段で述べた取り組みは、現在では発話の量を増やす段階から発話の質を高める段階へと移行しているが、そこでは学習者の発話の質を高める方法として、その背後にある思考の質を高めることをねらった取り組みを進めている。それは、学習者がより多くの情報を持った状態で自分の考えを作り上げていく学習を組織することと、より多角的な思考の交流の場を作り出すことである。

なぜなら、「対話」を話し合いの形態とし

て捉えると一対一のニューアンスが強いが、これを思考の交流の場として捉え、一対一での思考の交流から一対多もしくは多対多の交流の場へと高めていくことで、思考自体も多角的に広がりをもつことになるからである。

実は、比較的学習者自身の対話によって学習が展開するようになった学級でも、自分の考えはノートやプリントに書かれているが、話し合いになかなか参加できない学習者が相当数いる。そこで力点を後者に置き、より多くの学習者が話し合いに参加するための指導を行った。

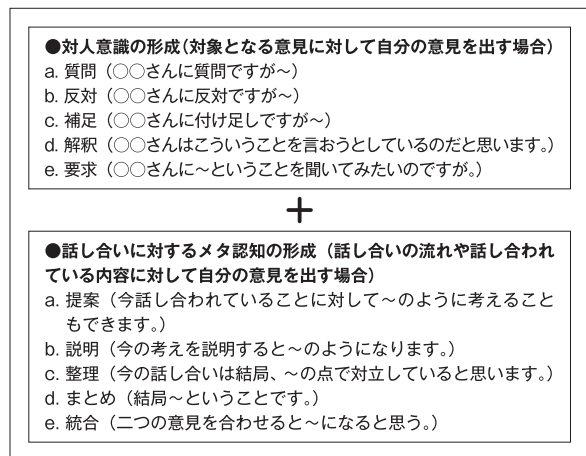
そもそも、話し合いにおける学習者の意識は次の四つの点に向けられる必要がある。

- 1 自分の考え
- 2 他者の考え
- 3 話し合いの流れ
- 4 話し合いの内容

授業を観察していると、話し合いに上手に参加できない学習者は、1や2といった「対人意識」はあっても、3や4といった「話し合い自体」に対する意識が低いことが多い。

1〜4はそれぞれに意識の向け方があり、それによって論理的に話し合いに参加することができるようになるので、その方法として、3と4とを意識した取り組みを行った。図1にその枠組み(フレーム)を掲げる。

図1



こういった枠組みを学習者に定着させる方法としては、教師の発問の中に織り交ぜることも考えられるし、振り返りのプリントとして記述させる方法もある。また、学習者自身がこういった枠組みを用いて他者と関わることと自身が、論理的な思考そのものであると考えることもできるだろう。

まづとも かずお 福井大学准教授。現在、福井県周辺の小学校や中学校で「対話型学習」への取り組みを続ける。また、サイトを立ち上げて学校現場への多角的な情報支援に取り組んでいる。  
(<http://www.jie-tabo.com/>)

# 「食感のオノマトペ」から学びを広げる

東京都西東京市立田無第三中学校

人見 誠

次のようになった。

「食感のオノマトペ」(注)は、生徒にとっては読みやすく親しみやすい、魅力的な学習材の一つである。普通に読んで終わらせてしまっただけではもったいない。そこで、「食感のオノマトペ」を読んだうえで、そこから発展させる学習を行ってみた。

## 1 世代間で使い方に差がある オノマトペを調べる

文章中では「べたべた」「ひりひり」は中高年層が、「しゅわしゅわ」「ぶるぶる」「まつたり」は若年層がよく使うとされている。生徒に聞いてみても同様の意見であった。そこで、その他にもこのようなオノマトペがないか実際に調査してみることにした。

今回は「さくさく」「しゃきしゃき」「こりこり」「ぼりぼり」の四つについて調べてみた。若年層は先輩や兄弟などに、中高年層については家の人や地域の方に協力していただいで、その結果を持ち寄った。まとめた結果は

○「さくさく」「しゃきしゃき」はどちらもよく使う。  
○「こりこり」「ぼりぼり」は中高年層の方がよく使う。

この結果について生徒たちは、「やはり普段の食べ物との関係が深い。」と分析している。文章中の筆者の主張を裏づける結果となった。

## 2 オノマトペを使わないで 表現してみる

生徒には、あらかじめオノマトペが使われている商品をさがしておくように伝えておく。次の時間に聞いてみると、多くのものがあげられた。

プッチンプリン、ガリガリ君、ギザギザポテト、ペロペロキャンデー、パクンチョコ、じつくりコトコト煮込んだスープ……。  
次に、この商品名をオノマトペを使わないで表現させてみた。すると、例えば次のような表現になる。

○プッチンプリン↓底の爪を折ると出てくるプリン  
○ガリガリ君↓かじると歯ごたえのあるアイス  
○ギザギザポテト↓表面ががっているポテト

生徒からは、「ただだから説明しているだけでわかりづらい。」「オノマトペを使えば簡単なのに……。」という声があがった。オノマトペの効果を実感することができた。

### 3 オノマトペを使って文章を書く

えびの天ぷら、親子丼、チャーハン、カレーライス、焼きそば、オムライスのうちから好きなもの一つ選ばせる。そして、それを誰かにおすすめるという想定で、コメントを書かせた。書く時の注意は次のとおりである。

#### コメントを書くときのポイント

- ①書き出しは、必ず料理の見た目、またはにおいの表現から書き始めること。その時、オノマトペを必ず使うこと。（両方をいれてもよい。）
- ②つぎに食べたときの感じをできるだけ詳しく書くこと。
- ③最低四つのオノマトペを使用して書くこと。

概ね次のような作品ができあがる。

#### 生徒作品例

●あつあつ、出来立てチャーハンです！  
フワフワ卵にしょう油の風味がプーンとただよってくるあつあつチャーハンです。  
ホッパホッパのご飯にしょう油の風味が口

の中にシュワーっと広がって、あつあつの出来立てチャーハンです。シューシーな野菜とごはんがからまりあっていて、おいしいです！食べてみてください！

●見るからにフワツとしたり卵やしょうゆのにおいがただよっていて、野菜がほどよくやわらかくなっています。  
「ご飯はホッパホッパと温かくて、フワフワの卵とよくからんでいておいしいです。ピーマンやネギは、火がよく通っていてしんなりしています。しょうがの食感がシャキシャキとしていてとてもおいしいです。  
香ばしくておいしいので皆さんも是非食べてみてください。」

学習を終えて感想を書かせたが、生徒の反応は好評であった。一部を紹介する。

#### 生徒の感想文から

○「オノマトペ」という言葉は初めて聞いたが、表現として「パリ」や「カリ」……。知らない間にたくさん使っていることに気づいた。それらを全部ひっくるめて「オノマトペ」だ。オノマトペの学習楽しかった！  
○たくさんあるオノマトペの中でも書いて

いる文にあうものは何個も出てくる。その中から一番おもしろいものを使って書いていくと、読んだだけでおいしい感じがわかる。オノマトペの力ってすごいと思う。

○オノマトペはとても大事な言葉だと思いました。ほんの短い言葉だけど、文章を効果的にわかりやすくまとめる大切な言葉だとわかりました。

今回は三つのことに取り組んでみたが、生徒の実態や授業の進度に応じて使い分けることもできる。一つでも実践してみただけだと幸いである。

#### 注

三省堂『現代の国語』一年所収

ひとみ まこと 自称研究会オタク。色々な研究会で学ばせていただいています。一つの方法にしばらく、様々な学びの可能性を考えるのが趣味？です。

# 生徒の「見方や考え方を生かし・鍛える、 「故郷」の実践

## 「学び合い」を意図した授業の創造

岐阜県恵那市立上矢作中学校  
山田 高秀

### 「不易」と「流行」の調和

「故郷」。魯迅・竹内好訳。一九二一年発表の不朽の名作。この作品が教科書教材として採り上げられるようになって、何年経つのだろうか。

そんな「不易」なる作品に、近年襲いかかった「時代の波」といえば、「詳細な読解に偏りがちであった授業を」といった、「読み取り・読み深め」の授業に対する、やや批判的なニュアンスを帯びた「言語活動の多様化」や、「つきたい力の明確化」・「単元・単位時間の評価規準の明確化」という「波」ではなかっただろうか。ここでは、こうした「波」(特に後者)に私自身がどう対処して、不易(諸先輩方のご実践)と流行(時代の要請)の調和を図ったのかを綴りたいと思う。

### 単元を通して育てたい「見方・考え方」

単位時間に、生徒の多様な見方や考え方を

基にした「学び合い」のある授業を成立させるためには、単元を通して育てたい「見方や考え方」を、授業者が一貫してもたなければならぬと考える。そこで、本単元において身につけさせたい「見方や考え方」を、次のように設定した。

●人物の状況や心情を、「状況の変化」を示す表現に着目し、作者の表現意図を踏まえながら見出そうとする見方や考え方

これを軸にして、生徒が各場面を学習する際に、どのような「状況の変化を示す表現」に着目するのか、或いは、着目した表現に対して、どの人物の視点を足場にしたアプローチをするのかなどを事前に予想し、単位時間の「学び合い」のあり方を構想するのである。また、そうした「学び合い」のある授業の中で、螺旋的・反復的に「見方や考え方」を鍛えられてこそ、生徒には、

◎書き手の思考や心情に迫り、自分の考えを構築する力

がつくと考えた。

なお、単元の評価規準は次の通りである。

#### 【関心・意欲・態度】

●「状況に生きる人間の姿」をとらえようと表現の仕方や文章の特徴に注意しながら、進んで作品を読もうとする。(C-U)

#### 【読むこと】

●風景や人物の巧みな描写とその変化が、人物を取り巻く状況の変化や心情の変化の比喩となっていることを理解し、書き手の「表現意図」をみぬくことができる。(C-U)

●「人間、社会」について考え、自分の意見をもつことができる。(C-E)

#### 【言語に対する知識・理解・技能】

●抽象的な概念などを表す多様な文章表現に着目して文章を読み進め、語感を磨き、語彙を豊かにする。(言語1-U)



さらに、単元の始めには、生徒の意識を連続させるために「初発の感想」を交流し、それを基にして、「単元を貫く課題」を設定した。

◎「わたし」の「故郷」に対する思いの変化を読み深めよう。

「思いの変化」を、「状況の変化を示す表現」に着目させながら、「わたし」の目線で読み取ろうとする生徒と客体視する生徒の、大きな二つの流れを生む意図がこの課題にはある。そして、この二つの流れを行き交いながら生徒は、「一人の人間として、状況をどうきり拓き、生きるか」について「自らの考え」を巡らせるようになるのである。

### 「学び合い」を意図的に組織する

ここでは、本作品中、最も読み応えのある、「どんな様……」を含む、第五場面を例にして、単位時間にどのような「学び合い」を意図したのかを簡単に述べたい。

#### 【本時のねらい】

「状況や人物の外見の変化」に、異なる人物の視点から着目し、それら細かな描写の積み重ねが、「閨土」と心を通わせることができなくなった「わたし」の深い悲しみをより効果的に表していることが分かり、二人の間を隔てている「壁」が、「閨土」自身の変化の

みならず、「わたし」自身の変化によってもたらされてしまったのだということを読み取ることができる。

したがって、この時間の規準(B)は、『唇が動いたが、』↓『はつきりこう言った』などの『人物の心情の変化を示す表現』に着目し、その意図と効果を理解すると共に、『わたし』の『故郷』に対する失望を読み取っている。」となる。

授業の冒頭では、この場面にいる「わたし」の「姿」『故郷』に対する思いの変化を生徒に問い、本時の課題化を図る。

◎「悲しむべき厚い壁」を感じてしまつ、「わたし」の思いの変化を読み深めよう。

この後、一人読みをさせ、意見交流に入るのだが、この際に大切にしたいことが、「子どもづかみの観点を、教師が事前にもっていること」である。これがなければ、「学び合い」は成立しない。本時は、

- 「閨土」の変容に着目して、「わたし」の心情を思い描く生徒
- 「わたし」の変容に着目して、「閨土」の心情を思い描く生徒

の二つの観点から、子どもづかみを行い、意図的指名によって、両者の「見方・考え方」

を学び合わせた。また、もう一つ大切にしたいのが、「問い返し」の吟味である。

先に示した観点のうち、後者の立場から読みを深める生徒は少ない。そこで、「あれほど再会を楽しみにしていた『閨土』であったのに、なぜこのような返事をしてしまったのだろうか。」という問い返しを事前に用意しておいた。この発問は、異なる人物の視点から、登場人物の心情を見出そうとする「見方・考え方」(着目の仕方)への転換を意図するものである。こうして「学び合い」を深め、

●「わたし」自身の態度も以前とは違う。そういう『わたし』の対応の『変化』が、『閨土』の『返答』を生み出してしまったのかもしれない。『わたし』はそのことに気づかないまま、『故郷』への絶望を深めているのだ。」

という読みが導き出されるのである。

最後に。「故郷」は今も私に、生徒のもつ「言葉に対する豊かな感性」を示し続け、新たな出会いの喜びに打ち震えさせてくれる作品であることを報告する。

やまだ たかひで 岐阜市立長良中学校を経て、現勤務校(三年目)に。岐阜県教育研究会・中学校国語教育研究会・研究部総括。

# 音読で切り込み、読み深める授業 —「ごんぎつね」の山場での実践—

愛知県北設楽郡設楽町立田口小学校  
佐々木 計江

## はじめに

本校では、子どもの声と笑顔があふれる学校にと願い、音読を国語の授業の中核に位置付けた研究を十年間に渡って続けている。音読を通して言葉に寄り添って読み深める授業を展開し、国語力の伸長を図っている。

ここでは「ごんぎつね」の実践を紹介し、音読の有効性を提案したい。

## 一 音読で山場を読み深める

### 1 会話文の音読の工夫で切り込む

物語の授業では、会話文の音読の工夫を切り込み口として人物の気持ちを想像することが、心情理解や場面把握に効果的である。

償いをするごんの優しさを知らずに「ごんを撃ってしまった兵十の言葉、「ごん、おまえだったのか。いつも、くりをくれたのは。」の音読の工夫を通して兵十の心情に迫り、クライマックスを読み味わう授業を行った。

### 2 授業の目標

●兵十の会話文の音読を工夫し、憎しみから共感へという兵十の心情の変化や、深い悲しみを読み取ることが出来る。

### 3 発問と指示

読み方と心情の説明を切り離してしまうと、音読を通しての心情理解は実現しない。「ごんを撃ってしまった兵十が言ったこの言葉は、どのように読みますか。音読の工夫と、そのときの兵十の気持ちについての考えを絡めながら、自分の思いを語ってください。」

会話文を板書した後、子どもに投げかけた。

教師は発問や指示をしたら、後は子どもが考え、意見を言うのを待てばよい。待てずに追い打ちをかけるように発問や指示を繰り返すと、子どもは語らなくなってしまう。教師が言葉を精選し、子どもが語る授業をつくと、子どもの目は輝き出す。

### 4 子どもの音読と発言の様子

①兵十の気持ちに寄り添った音読から

発問後すぐに出たのは、その場の状況から「驚き」「後悔」「悲しみ」などの兵十の気持ちをとらえた意見であった。

●びっくりしたように読む。(音読)「ごんがくりをくれたことを初めて知り、驚いたから。」

●驚いたというのもあると思うけれど、撃ってしまったって真実が分かって後悔しているから、悲しそうに小さな声で読む。(音読)

●ごんの優しさを知ってすまなかつたと思っている。すごく悲しそうに読む。(音読)

### ②表現、表記に着目した音読から

「書きぶり、表現はどうなっていますか。」と、表現、表記への着目を促す補助発問をすると、言葉に即した次のような意見も出た。

●前は「ぬすみやがった」「ごんぎつねめ」と怒りを込めて乱暴な言葉で言っていたけれど、「ごん」と優しく語りかけている。

兵十の憎しみの気持ちが消えた。(音読) この意見は、前の部分の叙述と比較しての

根拠のある意見であり、説得力がある。

●普通の文と言葉の順番が違っている。「ごん、おまえだったのか。」が先に来ている。先の文を少し強く読む。(音読) ごんを大切に思うようになったことが分かる。

繰り返し音読をし、補助発問をしたことにより、このように倒置の表現に着目した意見も出た。言葉に即した読み取りを通して、兵十の気持ちの変化をとらえることができた。

### ③位置関係をとらえた音読から

声の届け先にこだわって音読しながら発言する子どももいた。音読を通して人物の位置関係をとらえ、場面を再現することができた。

●兵十は横たわったごんに声を届けている。

●倒れてしまったごんを見て、ごんに向かってつぶやくように言った。(音読)

### ④間にこだわった音読から

音読と絡めて兵十の気持ちに迫る話し合いでは、多様な興味深い意見が出てきた。

●ごんを撃ってしまった兵十は、呆然としている。こんなときは、声は出ないから、「ごん」と言った後に、間をあける。(音読)

こう述べた子どもは、五秒ほど間をあけて読み、思いのこもった音読をした。その音読を聞いていた他の子どもの表情からは、納得、共感といった様子が伺えた。教室は心地よい緊張感を伴った学びの空気に包まれた。間を

取ると、呆然としている兵十の様子や、兵十の驚きや深い悲しみがよく伝わってくることを確認し合い、授業は深まった。

### 5 音読で心情理解

子どもたちは音読をしながら兵十の思いを想像し、気持ちの変化ややりきれない悲しみをとらえた。音読の工夫が心情理解を促すということを、改めて実感した授業であった。

ここでの読み取りは、その後の授業にも生きた。ごんと兵十の心が結ばれたことへの共感や、やっと分かり合えたのが別れの時きだったという悲しい結末のせつなさなどを語るまよめの授業へと自然につながった。

## 二 音読の効果的導入を

学習指導要領では、音読は「声に出して読むこと」と表されており、「内容理解をねらいつつ」と書かれている。音読を手立てとして活用し、心情理解を深めた本実践は、その趣旨を踏まえたものである。

音読を生かして読み深めるのにふさわしい教材は多い。例えば、「かさこじぞう」の大年の市の場面で群読を取り入れると、より臨場感が出て、場面の様子をありありと想像することができる。また、「注文の多い料理店」では、音読することで、軽妙、かつ、辛辣な宮沢賢治独特の表現を味わうこともできる。

音読を位置付けると、想像だけが空回りするということがなくなり、言葉を根拠にした読み取りが可能になる。教材を分析し、音読を導入することが効果的な場面を吟味し、意図的に位置付けたいものである。

### おわりに

国語の指導法は多様にあるが、音読を生かすことも有効な一つの方法である。音読を取り入れると、教室に子どもたちの声が響くようになり、授業が活性化される。音読を通して詩や物語に親しむ子どもを育てたいと思う。

ささき かずえ 音読で読みを深める授業や子どもとともに創る群読についての研究を継続。音読と作文の指導は、私の生きがい。

# これまでとは違った目で物語を見つめてみよう —六年「自分の力でゴールを決める！」の実践より—

横浜国立大学教育人間科学部附属横浜小学校

茅野 政徳

高学年になると、物語を味わいながら登場人物の心情の移り変わりや考え方を多面的にとらえるだけでなく、表現や文体に表れた作者の意図や工夫を感じ取り、自分なりの考えをもてるようになる。言い換えれば、客観的視点で物語をとらえ始める時期である。

しかし、テキストの言葉ひとつひとつについて作者の意図や工夫、書きぶりなどを検討したり、テキストの概観について自分の考えを表出したりする学習は、これまであまり行われてこなかったように思う。

そこで、推理小説で謎解き（ゴール）をしたり、物語の最終場面（ゴール）を自分で書き、本物の作品と比較したりする学習を試みた。物語に対して客観的・批評的な立場に立ち、自らの考えを発信する活動は、子どもたちの読みの視点を広げ、読みを深め、作品のすばらしさに気づく有効な手段になり得ると考えたからだ。

作者が紡ぎ出した一言を無駄にしないで読

ませたい。活動に必然性があり、自ら進んで考えを友達に伝える意欲が喚起される単元をつくりたい。そう願って、本単元を構想した。

## 単元のねらい

- 物語の最終場面を想像したり批評したり、推理小説の謎を解いたりする目的に向かって、文章中の細かな表現や情景、場面の移り変わり、登場人物に着目して読み深める。
- 優れた叙述や作者の意図・工夫を感じ取り、想像を膨らませて読む楽しさを味わう。

## 学習展開と子どもたちの学び

### 第一章

言葉の名探偵になり、犯人やうそを見破ろう！

- 問題編と解答編に分かれている推理小説を用いる。犯人やトリックを見破るために文章の細かな表現や登場人物の言動に着目する。
- ①単元のめあて（目標）や学習の流れを知る。
- ②推理小説を読み、文章の言葉を手がかりに

して犯人やトリック（ゴール）を決め、その根拠をグループやクラスで話し合う。

参考：少年探偵ラウン（併成社 ドナルド・ソボル著）  
消えたパンダ金魚事件（仮説社 朝の連続小説 杉山亮著）

### 「今日の学び」より…学習後の感想

- これまで適当に読んでいたことを実感した。
- 文章の言葉ひとつひとつにいろいろな意味があり、大切だとわかった。文章をしっかり読むことはつかれるけど、そのぶんなぞがとけたときの喜びは大きく、楽しい学習になった。
- 友達の意見で自分の考えが確かなものになったり変わったりした。一人では、考えも限られてしまいが、人が増えれば増えるほど豊かな学習になると思った。

### 第二章

物語の最終場面を書き、友達や作者と比べよう！

作家になったつもりで物語の最終場面を書き、友達や作者が書いた最終場面と比べ、話



し合う。想像を膨らませるおもしろさに気づき、細かな表現に着目する必要性を感じ、作者の表現の意図や工夫に対して考えをもつ。

①物語の最終場面前までを読み、自分で最終場面（ゴール）を書き、クラス全体で読みあう。

②記述の根拠を話し合い、作品を手直しする。

③作者の最終場面を、自分や友達の作品と比べ、作者の表現について考えを発表する。

教材：海的光（教育劇「うみのひかり」 結島英二著）  
サーカスのライオン（ポプラ社 川村たかし著 斎藤博之絵）

「今日の学び」より

- 作者が文章にちりばめた言葉が最終場面です。パズルのピースのようにじっくりおさまったのがすごい。自分で最終場面を書いてみたらこそ気づけたと思う。
- 物語に味があると思う。これまでは一口しか味わわず、かくし味に気づけなかったと思う。友達の作品の中には、かくし味までつかんでいるものがあり、手直しの参考になった。
- 作者の最終場面は短かったけれど、少ない言葉が文章のたくさん言葉を引き出しているように思えた。やはり、作家はすごい！
- 物語を読むだけで楽しんでいただけれどもっと細かい部分に着目すると何倍も想像がふくらみ、楽しめるのだと感じた。

第三章

物語の最終場面に對し、自分の考えを表そう！

これまでの学習を生かし、物語の最終場面に批評的に読み、自らの考えを表す。納得する点や疑問点を出すことで物語の奥深さや作者の力を実感し、新たな読み方を身につける。

①最終場面をどう受け止めたか、文中の言葉を手がかりにしながら考えをまとめる。

②考えをクラス全体で交流し、作者の表現意図や工夫、物語の展開などについて自らの考えの変化や深まりを記述する。

教材：風のゆうれい（リブリオ出版 テリー・ジョーンズ著）  
黄色いボール（河出書房新社 立松和平著）

「この学習の学び」より

- これからも作者はなぜこのような書き方をしたのかと考えながら、物語を読みたい。
- 注目した言葉によって物語の読み取り方が変わることを学んだ。物語の中にはいろいろな言葉がかくされていて、四十四人みんなの考えを組み合わせることによって、新しい物語を読んでいるように感じ、本当に楽しかった。
- 今回の学習を通して、作者はさりげない言葉がちりばめ、読者に対してたくさんこのことを考えさせ、想像させてくれると思った。

今後に向けて（成果と課題）

PISA調査の結果が公表され、「読解力」という言葉が盛んに聞かれるようになった。私にとっては、これまでの実践の至らなさを再認識するよい契機となった。そして、従来の読みの指導を踏まえつつ、子どもたちに新たな読みの視点を与え、読みの力を育てたいと思ひ立ち、試案としてこの単元を構想した。

単元を通して子どもたちが、自らの読書生活をふり返り、ひとつの言葉がどれだけ大切なものなのかを実感し、さらに教室で友達と学ぶからこそ、考えや想像が広がっていくことを体感してくれたことは成果である。しかし、教材や単元構成、目標の明確化など、見直しが必要な点が多い。

これからも子どもたちが能動的にテキストにかかわり、自分事として友達の考えに耳を傾ける。そんな国語教室をつかっていきたい。

かやの まさのり 横浜国立大学府川源一郎教授・高木まさき教授に指導を仰ぎながら、微力ではあるが、今年度も読解力の実践研究に励んでいる。  
kayano@pm7501.yokosyo.ynu.ac.jp

## 「書ける」先生も「書けない」先生も 書写の授業に取り組もう

神奈川県横浜市立港南台第一中学校 国語科

### はじめに

港南台第一中学校では、平成一七年度より二年間、横浜市「国語科授業改善モデル作成協力校」として、『読解力』『問題解決能力』の向上を目指す国語科の授業改善―国語科授業のパラダイム転換を目指して―を研究主題として研究を進め、三回の公開授業研究を行った。ここでは、本年二月に実施した書写の授業研究について報告する。

### 当日の授業の概要

当日は一年・二年の二つの授業を実施した。一年生は「空想」を取り上げ、「楷書と行書を比較して、行書の特徴と基本的な書き方を理解する」ことを目標に、書字が得意な教師二名のT・Tで、一人の教師が実際に書字の場面を見せるなどの指導を行った。二年生ではあまり書字が得意ではない教師二名のT・Tにより、「行書に調和するひらがなの

筆使いを学ぶ」「目的や用途に応じて、適切に筆記具を選んで書く」ことを目標に、教材DVDを活用したり、教師が自ら書字を行った後生徒と共に検討する等の活動を行った。

### 国語科における「ティーム・ティーチング」

一つの教室に複数の指導者がいることは、書写のように技能を扱う授業においては特に有効である。

本校では、時間割作成上の工夫により、一・二年生の国語の授業において週一時間のT・Tを設定している。このことにより、生徒に学習に対する集中力を高める支援を行うことができたり、複数の教師の目で評価を行うことにより、より客観性・信頼性の高い評価を行うことができたり、という効果を実感している。さらに、国語科の教師が他の国語科の教師の授業に「T2」として参加することを通じて、必然的に教師どうし授業を見合

うことになり、本校国語科教師の力量の向上にとっても大きな役割を果たしている。

さらに、生徒にとっても、T・Tが日常化しているので、授業に複数の指導者がいることについての違和感や抵抗感が払拭されている。このことは、本校の教職員が「ティーム」で教育活動にあたっていることを常に生徒が実感することのできる機会として重要であると考えている。

### 「国語力」向上のために書写指導が果たす役割

現在国語科で大きな課題とされている「読解力」とは、情報を受信し、思考し、発信することのできる能力である。このような「読解力」を確かな国語力として定着させるうえで、書字能力の向上を欠かすことができないものであると考えている。

受信した情報を整理してその内容をまとめるために書く、自分の思考を確かなものにする

るために書く、発信する内容を整理するために書く、などあらゆる場面で文字をある程度の速さで書くことが必要である。また、発信する形式にもよるが、自分の考えを人に伝えることは基本的に書くことによって行われる。

従って、「読解力」を育てるうえでも、

○書くことを嫌がらない子どもを育てる

○「人に読まれる」という意識で書くことを育てる

ことが欠かすことの出来ない国語科の学習内容であると言えよう。

## 書写指導の課題と今後の方向性

「書写」の学習については、学習者の側、指導者の側のそれぞれに課題がある。

学習者の側の課題としては、携帯電話や



パーソナルコンピュータの普及等に伴い、自分自身が筆記具を使用して肉筆で文字を書く機会が減少していること、そのため、文字を書く速度が遅くなっていることがまず挙げられる。また、そのために文字を書くことを面倒に感じ、正しい字を書こうとする意識が低下していると思われる。それは、例えば「絵文字」「ギャル字」「クセ字」という形で現れている。

一方、指導者の側には、まず、書写の指導時間を確保する等カリキュラム編成上の課題がある。そのうえ、国語科の教員免許状を取得していても必ずしも書字が得意であるとは限らず、毛筆書写に対する抵抗感を持つ指導者も多い。また、「書写指導」ではなく「書道教育」としての作品主義に陥りがちなことも課題である。

これらの課題を受けて、これからの書写指導の方向性として、本校では次のように考えている。

一つは、硬筆で文字を「正しく整えて速く」書くための書写指導をすることである。日常生活の中では、肉筆で文字を書く機会が多くある。その際に求められるのが、硬筆で文字を「正しく整えて速く」書く能力である。

そして、硬筆の書字能力を向上させるためには、点画、筆脈をきちんと書くことによっ

て、字形が整うことを理解させたい。そのための土台となるのが毛筆書写である。硬筆の書字能力の向上を目指すための毛筆指導という視点で指導にあたる必要がある。

当日助言者をお願いした広島大学の松本仁志先生から、「中学校国語科における書写指導はあくまで国語の授業であり、『書道』教育や作品主義に陥ってはならない。したがって、書字があまり得意でない先生でもさまざまな工夫を行いながら授業を進める必要がある」との助言をいただいた。筆者（三藤）のように書字が得意でない国語の教師にとって書写の授業は、生徒と共に学ぶことのできる絶好の機会であるとも言える。これからの指導方法を工夫しながら、文字を大切にする授業を進めて行きたい。

かながわけんよこはましりつこうなんだいいちちゅうがっこうこくごか 滝澤なぎさ・央倉美佐・土屋京子・三藤敏樹の四名で、今年度からは文部科学省の「国語力向上モデル事業」の委嘱を受け、引き続き研究と実践に取り組んでいます。

# 「物語」の必要と不必要について

明星大学 宮川 健郎

ぼくの母親の名前は、ヨウコという。  
 ぼくは小さいときから、ヨウコが母親だと教えられてきた。

ヨウコは、茶色い毛並みのきれいな、犬だった。

これは、昨年刊の草野たき『ハーフ』の冒頭。「ぼく」は、ものごころついたころから、父さんに犬のヨウコが母親だといわれて育った。つまり、「ぼく」は、人間と犬とのハーフだというのだ。作品のところで、そのヨウコがいなくなり、父さんと「ぼく」は、必死でさがす。父さんは、会社にも行かなくなる。そのさなか、「ぼく」は、とうとう、おばさんの家をたずね、「本当の母さん」のことを聞き出す。まだ二十歳だった「本当の母さん」は、「ぼく」を産んですぐ家を出ていってしまった。「ごめんさい。わたし、じんがありません。」という手紙をのこして。母さんをさがしまわった父さんは、半年

後、「ヨウコが帰ってきました」といって犬を連れてあらわれたという。「本当の母さん」も、ヨウコという名前だったのだ。

妻をうしなった『ハーフ』の父さんには、現実の空洞を埋めて何とか生きるために、「物語」が必要だったのだろう。しかし、その「物語」は、もう六年生になった「ぼく」を息苦しくもさせている。「ぼく」にはもう、「物語」が不必要になったのかも知れない。犬のヨウコは、十日以上もたつて発見される



『ハーフ』  
 草野たき／ポプラ社／2006年



『教室の祭り』  
 草野たき＝作／北見葉胡＝絵  
 岩崎書店／2006年

が、すっかり体が弱っていて、やがて亡くなる。作品のおしまいで、ヨウコを亡くした「ぼく」と父さんは、ヨウコという「物語」抜きではじめて向き合うことになるのだ。「ハーフ」は、「物語」の必要と不必要について考えさせられる作品だけれど、作者は、つづいて『教室の祭り』を刊行した。主人公は、小学五年生の澄子だ。愛称で呼び合い（カコースミ）、「グッド、モーニン〜！」と合言葉を言い合う「友だち物語」は、友だち／友だちではない、という差別を生み出し、それは、「いじめ」へとつながっていく。作品は、主人公が、この「物語」を抜け出すまでを描く。彼女が友だちとの新しいつながりを得る結末には、大きなカタルシスがあった。

みやかわ たけお 日本児童文学専攻。著書に『現代児童文学の語るもの』（日本放送出版協会）など。





## 情報を編集するということ

独立行政法人メディア教育開発センター 堀田 龍也

小学校では、たとえば遠足の作文の書き方で以下のような指導場面がある。

「朝、7時に起きて、顔を洗って弁当を持って、学校に行きました。運動場に集合して、バスに乗って、〇〇山に着きました。みんなで遊んだ後、お弁当を食べました。そのあと、バスに乗って学校に戻りました。とても楽しかったです。」

多くの教員は、このような作文の書き方はよくないことだと教える。たとえば次のように指導する。

「一番心に残ったことは何ですか？ その部分を際立たせて表現しなさい。」

「みんなが体験したようなことは書かなくていいんです。あなただけが知っていることを書きなさい。」

小学校高学年になると、こんな指導もある。「一番心に残ったことを作文の冒頭に持ってきたなさい。その後、当日までの苦労を書きなさい。」

どちらかといえば、全体を時系列に書くことはいいことではないとされるのだ。クライマックスの部分に焦点化して書き、クライマックスに関係のない場面は割愛するように教えている。ほかの人が知らないことを中心に書くようにとも教えている。さらには、必要に応じて時間的な倒置法を使うようにも教えているのだ。

もちろんこれは、学習指導要領で位置づけられた国語科の正式な学習内容である。日本語を表現のツールとして扱っていく私たち

が、小学校高学年段階で身につけなければならない最低基準であるとされている学習内容なのだ。

私たちが自己紹介をするとき、自分のすべてを話すことなど到底できることではない。自己紹介は短い方がよいとされ、ちょっとぐらい脚色しても、相手に覚えてもらえるように工夫することが求められる。日記を書くときも、その日に起こったすべてのことを書くことなど所詮無理であり、現実の体験から書く内容を「切り取る」ことになる。デジカメで撮影するときには、デジカメのフレームの外のもものは撮影できない。やはり必然的に「切り取る」ことになる。

人に情報を伝えるときには、所詮すべての情報を伝えることなどはできない。だから、必ず事実の一部を切り取り、編集をして情報提供するしかない。それは、自己紹介でも日記でも作文でもデジカメでも同じことで、情報伝達における必然であり宿命である。

「全体」か「一部」か。誰かが誰かに情報を伝えるという営みにおいては、この軸が「全体」に振れきることはあり得ない。必ず「一部」となる。しかし、その「一部」は、どのような意図で「全体」から切り取られたのか。そのことを追求する姿勢が必要だ。それが無い限り、「全体」を見据える姿勢が育たず、メディアに振り回される人になる。

ほりた たつや 文部科学省参与などを併任。政策立案から教育現場の実践指導まで、情報教育に関するあらゆる場面に精力的にかかわっている。

# 日本の神話を素晴らしい絵本から

日本子どもの本研究会理事  
三芳町立中央図書館司書  
代田 知子

私には、小学生の時「いなばのしろうさぎ」の影絵や「やまたのおろち」のアニメーションを全校児童で楽しんだ思い出があります。でも、これが、我が国のはじまりを書き留めた「古事記」の一部であり、日本の神話でもあるということが頭の中ではじめて整理できたのは、高校の日本史の教師に勧められて、岩波少年文庫の『古事記物語』（福永武彦作 岩波書店 一九五七年初版）を読んだときです。男神と女神が天の浮橋の上から、下界の海（水に油が浮いているような頼りないもの）に長い矛をつきたて、ゆっくりかきまぜ日本列島を次々に作ったという最初の話から、「古事記」には思いがけない展開が多く、一気に読み終えてしまいました。神話は堅苦しい物だと思いついていた私には大変意外で、こんなにおもしろいなら、子ども時代から神話全体の流れを知っておきたかったと思っただけです。

ですから中学校から、教室で読み聞かせなどをしてほしいと依頼を受けたとき、即座に「古事記」をもとにした絵本『日本の神話（全六巻）』（舟崎克彦文 赤羽末吉絵 あかね書房 一九九五年初版）を読みたいと思いました。赤羽画伯の日本画風な重厚な絵がすばらしく、絵を見るだけでも、いにしえの世界を味わえると思ったからです。でも、いき

なり「神話」というと堅苦しく思いそうです。そこでまず、「三枚のお札」を語りました。そして、「この昔話では、小僧が後ろに札を投げて、鬼婆の前に障害物を出しながら逃げたでしょう。同じように物を投げて逃げるといふくだりが、日本の神話にもあります。ちょっと読んでみましょう」と、『日本の神話 第一巻 ―くにのはじまり―』を読んだのです。中学生は、昔話と神話の共通点や、神話の中の日本の神様が意外にも人間臭いことに興味を持ったらしく、随分集中して聞いてくれました。



しろた ともこ 図書館や学校、保育所などで、子どもたちに読み聞かせや語りやブックトークができる今の仕事が大好きです。

著書…『読み聞かせわくわくハンドブック』（代田知子著 一声社 二〇〇二）  
DVD…『絵本・読み聞かせ おうちで実践編 1』  
2』（代田知子監修・出演 アスク 二〇〇五）

三省堂 国語教育

# ことばの学び

バックナンバー

a new way of learning Japanese

webサイト

<http://www.sanseido.co.jp/>

三省堂webサイトでは『ことばの学び』をPDFファイルにて無料閲覧できます。



- vol.1 特集 「新しいことばの学び」を考える
- vol.2 特集 「対話」のある場所
- vol.3 特集 ことばとからだ
- vol.4 特集 メディア・リテラシーを考える



- vol.5 特集 「聞くこと」の学びは可能か
- vol.6 特集 漢字の学びの新たな可能性
- vol.7 特集 読書指導 10のアイデア
- vol.8 特集 今、問われる「読むこと」の学習指導
- vol.9 特集 個に応じ、個を生かす学習指導とは
- vol.10 特集 「国語科書写」の学びを創る
- vol.11 特集 学びを生み出す「カリキュラム開発」と「評価」
- vol.12 特集 学ぶ意欲を引き出す工夫
- vol.13 特集 思考力の育成



## 中学校教科書『現代の国語』 訂正のお知らせとお願い

『現代の国語』に訂正の箇所がございます。ご指導の際は、ご留意くださいますようお願い申し上げます。なお、平成20年度は、訂正した教科書を供給いたします。

学年	頁	行・箇所	平成19年度版	平成20年度版	備考
2	13	下1	「飛ぶ- <small>ちゅうやく</small> 跳躍-ジャンプ」	「跳ぶ- <small>ちゅうやく</small> 跳躍-ジャンプ」	学習に支障があるため。

## 編集後記

連載コラム「本から読み解く今の子ども」では、毎回、児童書を中心に紹介しています。今回の『教室の祭り』（草野たき作／岩崎書店／二〇〇六年）は、その展開のおもしろさで一気に読み進められる一冊です。

小学校五年生の主人公は、新しくできた友人と以前の友人との間で、その関係を模索し、葛藤します。自分が本当はどうありたいのかと正面から向き合う姿は、世代を超えて、大きな共感をよぶのではないのでしょうか。自分に問いかけること、そして考えることから逃げないということは、成長していくうえで大切なステップだと改めて感じました。(S)

## 三省堂 国語教育 ことばの学び 第14号

二〇〇七年十月十五日発行

定価 一〇〇円（本体九六円）

編集・発行人 八幡 統厚

〔発行所〕 株式会社 三省堂

〒一〇一-八三七

東京都千代田区三崎町二-二二-一四

TEL 〇三(三三三三)九四二七〔編集〕

振替 東京 〇〇一六〇五五五三〇〇

〔印刷所〕

泰成印刷株式会社

東京都墨田区両国三-1-11



# すぐに役立つ 日本語活用ブック

三省堂編修所 編

定価 1,470円(本体1,400円+税)  
B6/336ページ

本書は「大人のドリル本」ではありません

いざという時に、すぐに役立つ日本語の「使い方」を分かりやすく紹介！  
役に立つ場面別用例集（場面別 敬語用例集／場面別 あいさつ例集／  
場面別 エレベーターの書き方など）、知って得する慣用句・対義語・難  
読語、使える「四字熟語ミニ辞典」「現代カタカナ語ミニ辞典」「ABC  
略語ミニ辞典」、知識が広がる「ブログの基礎知識」「便利なサイト一覧」  
など、情報満載！ 探しやすい略号付き「50音主要索引」付き。



## うめ版

新明解  
国語辞典  
×  
梅佳代

写真 梅佳代・文 新明解国語辞典

定価1,470円(本体1,400円+税) 四六変/128ページ

第32回(2006年度)木村伊兵衛写真賞受賞、ファースト写真  
集『うめめ』が大ヒット中の新鋭写真家・梅佳代が、『新明解国  
語辞典』とコラボレート。独特な観察眼に基づく写真とことば  
が、真面目で妙ちくりん、イミフメイでカワイイ、微笑ましく  
もどこか切ない……そんな〈人間とことば〉の世界を描き出す。



## 新明解 国語辞典

第六版

並版  
山田忠雄(主幹)・柴田武・酒井憲二・  
倉持保男・山田明雄 編

定価3,045円(本体2,900円+税)  
B6変/1,696ページ

現代日本語のあるべき姿を、深い思索  
の中からとらえた国語辞典の決定版！  
収録語数は7万6千5百項目、重要語  
は二段階に表示、また「運用」欄を新設。



## 力のつく 古典入門学習 50のアイデア

教育文化研究会 編

定価2,310円(本体2,200円+税) A5/224ページ

気軽に楽しく短い時間で

楽しみながら古典に親しむための学習  
アイデア50編を収録。ただ名文に  
ふれるというだけでなく、さまざま  
角度から古典の世界にアプローチでき  
る学習活動例を満載。

詳しくはwebサイトをご覧ください → <http://www.sanseido.co.jp/>

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--